

「あの魚が食べられなくなるかも...?」世界有数の水産大国の日本で、そんな将来が訪れてしまうかもしれません。

主要魚種の不漁、担い手の不足、海洋環境の変化、資源管理の難しさなど、日本の水産業は多くの課題に直面しています。

また、昨今の様々な情勢の変化により、食の安定供給が国家安全保障上のリスクとして改めて浮き彫りになりました。

福島県福島市を中心にスーパーを展開するいちい。

東日本大震災に伴う風評被害に苦しむ地域の水産業を目の当たりにし、創業が魚屋であるいちいとして、地元へ貢献できる方法を検討していました。

その強い思いに対し、一次産業を通じて地域経済の活性化をめざしていたNTT東日本、NTTアグリテクノロジー、いちい、陸上養殖に関して多くの技術やノウハウを持つ岡山理科大学とでタッグを組み、ここに世界初のチャレンジがスタートします。

養殖が難しいと言われているベニザケの養殖事業化に向けた実証プロジェクトが開始されました。

陸上養殖は、川や海からポンプで水を組み上げるかけ流し式が主流ですが、餌などで汚れた水を排水するため、環境への負荷が課題となります。そこで私達が選んだのは、完全閉鎖循環式という仕組みです。飼育で汚れた水をバクテリアの力で浄化し、再利用することで換水が不要になります。そのため、どこでも安全安心な環境で計画的な生産ができます。

しかしながら、生産性高く魚を育てるには、経験やノウハウが重要です。そこでNTT東日本はICTにより水質などのデータをクラウドで一元管理し、遠く離れた場所にいる専門の方からアドバイスを頂ける環境を構築しました。

株式会社いちい 主任 秋山享仁氏

「遠隔で専門家からの養殖指導を受けることが出来る環境で、養殖を実施できることで、養殖が難しいと言われているベニザケを、一定の歩留まりの中で安定した養殖が出来ています。」

岡山理科大学 准教授 山本俊政氏

「たとえばベテランはどこを見ているのか？ 魚の動きや餌の食べ方、色を見ているなど、そういうところはなかなか文章化できない部分でもあるので、それをよりリアルに具体化して形にして数値化して、養殖をサポートしていくのは、まさにこれからの大切な技術だと思います。」

誰もがどこでも始められる陸上養殖モデル。この仕組みと、好適環境水という、岡山理科大学が開発した魚の生育を早めることができる人工海水の技術、飼育ノウハウとを組み合わせ、ベニザケの大型化にビジネスベースで世界で初めて成功しました。2023年7月には実際にいちいの店舗で試験販売も実施し、地域のお客様からご好評の声をいただきました。

株式会社いちい 代表取締役社長 伊藤信弘氏

「福島というこの地が(漁業にとって)今 非常にナーバスなので、このような取り組みをきっかけに魚の養殖の一大生産地になって、「福島発」を世界に向けて自信を持って発信できる「安心・安全なお魚の供給の原点」というところになってくれたらと思います。」

地域に新たに陸上養殖事業が興ることによって、地域の遊休アセットの活用、地産地消、関連産業への波及、地域の雇用の創出、陸上養殖事業の拡大、という経済循環が期待できます。

今後は、川俣町といちいとの連携協定をもとに、地域の廃校の利活用の検討を、産官学で一体となって進め、環境と地域経済の両方が持続可能な水産業の事業化をめざします。

国内外の様々なパートナーの皆さまと手を組みながら、NTTグループのアセットを共に駆使することで、食の安定供給、一次産業の成長と伝承、魅力向上を通じて、地域の活性化に貢献してまいります。